論題と焦点の文法素描

石　黒　昭　博

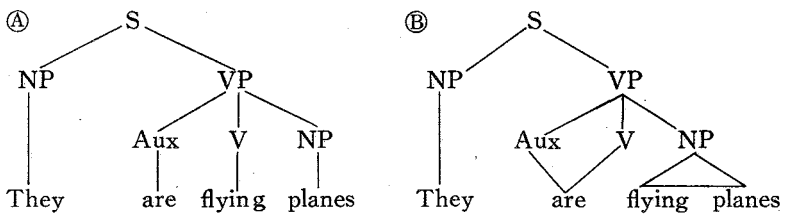
Noam Chomsky の提唱した生成文法理論は構造主義文法では説明の極めて困難な文のあいまい性を深層構造という概念を導入することによって解明した.[1]

(1) Visiting relatives can be troublesome.

(2) Starving children can be dangerous.

(3) They are flying planes.

上記の3文[2]はいずれも2通りに意味解釈のされ得るものであるが，表層構造から意味解釈の違いを形式的に説明することは困難である.[3] 例えば，(3)はその深層構造Ⓐ，Ⓑを考えれば，2通りの異なった意味が明らかになる.



しかしながら，この Chomsky 流の深層構造文法も形式化の厳密さを余りに強く固持し過ぎたので，Robin Lakoff の指摘するごとく「余りに強力過ぎる文法」[4]となってしまったのである. Chomsky は2つの文の深層構造が異なれば，その2つの文の意味は必然的に異ったものとなるという立場をとるが，George Lakoff らはこの「余りに強力過ぎる文法」に疑問

を投げかけたのである．George Lakoff は，

(4)

ⓐ John cut the cake with the knife.

ⓑ John used the knife to cut the cake.

の２文は，意味が全く同じであるから，Chomsky 流にいえば，同じ深層構造から導かれなければならないはずなのに，事実は全く異る点を指摘した[5]．Chomsky の立場からは，上のⓐ，ⓑは深層構造が異るから同じ意味であるはずがないという論点を守ることになる[6]．

さらに，

(5)[7]

ⓐ John sliced the meat with a knife.

ⓑ John used a knife to slice the meat.

(6)[8]

ⓐ John will leave for Europe tomorrow.

ⓑ John leaves for Europe tomorrow.

ⓒ John leaves for Europe every Thursday.

の各文でも，(5)ⓐ，ⓑは深層構造が異るのに意味は同じ，(6)ⓐ，ⓑは動詞句がⓐ will leave, ⓑ leaves と異るのに意味は同じ，一方，ⓑ，ⓒは動詞 leaves の形は同じなのに意味は異るという，深層構造上及び語単位（この場合は動詞 leave）での問題点も明らかになってきた．George Lakoff, Robin Lakoff らの唱える生成意味論は，上に述べたような，Chomsky 流のいわゆる「古典的変形文法」の枠からは外れるが，自然言語にあっては重大な存在意義をもつ，意味の構造を探る試みである．

最近の生成意味論の大きな観点は文中における各範疇間の関係を探ることに向けられている．生成意味論はより深い文の構造を見究めることを目

的とするが，意味の存在する次元を，表層構造に見られる統語論的表示から発見し，記述しようとする手順をとる．生成意味論が目標とする範囲は，表層構造に見られる各範疇が合図する意味全般であるが，大まかに整理すると次の3つに分けられよう．

Ⅰ．主語，述語動詞，目的語，補語，修飾語という文の各要素の表わす意味，及び各要素相互間の関係．

Ⅱ．動詞句（助動詞，動詞の区別，動詞と補語の関係など）や前置詞句（前置詞と後続する名詞の格など）の意味と機能．

Ⅲ．文全体がひとつの主題として成立するための過程．

本稿では，上記Ⅲにあげた主題の成立過程から見た文の意味を論じてみる．[9]

主題形式である文はひと組の論題を包含する．

(4)の

ⓐ John cut the cake with the knife.

ⓑ John used the knife to cut the cake.

という2文をめぐる Chomsky と George Lakoff の意見の不一致は先程紹介した通りだが，この両者の論点の相異は論題に対する見方の相異というように解釈できよう．つまり(4)ⓐ，ⓑの2文は論題から見れば共に2つの論題，すなわち，

1. 他動詞[10]—目的語論題（—が—を…する）

2. 道具使用論題（—が—を〔道具として〕使う）

を包含している．つまり次のような基底文[11]で表わされる基底論旨が存在しているのである．

(7)

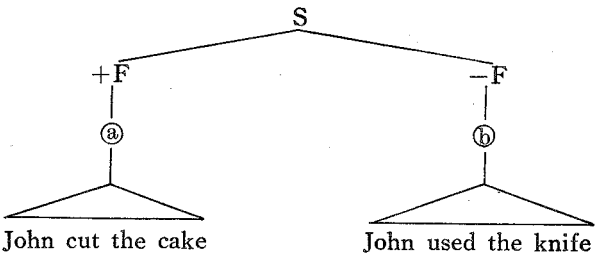
ⓐ John cut the cake.

ⓑ John used the knife.

次にこの文法では，「焦点」という概念を活用する．ⓐの焦点は「ジョンがケーキを切ったこと」であり，ⓑの焦点は「ジョンがナイフを道具として使ったこと」である．ひとつの文にはいくつ論題があってもふつうひとつの焦点しか存在せず，これはその文の形式がいわゆる単文であっても，はめこみ文であっても同じことがいえる．従って，

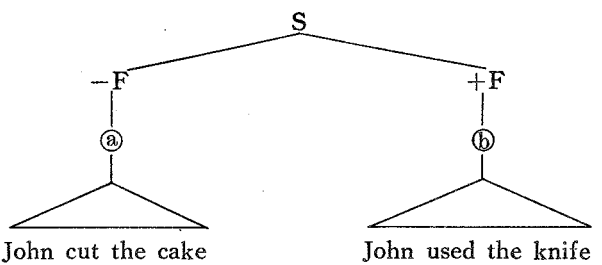
John cut the cake with the knife.

の文は(7)ⓐに焦点のある（＋Focus）文で，図示すると，



John used the knife to cut the cake

の文は，(7)ⓑに焦点のある文で，図示すると，



のように表わされる論題的構造をもつものと解釈できよう．ひとつの文中

に論題がいくつあっても，表層構造として現れるときには，そのうちのひとつに焦点が当てられているのである.[12]

次にこの理論と Charles J. Fillmore の提唱している格理論を比較してみよう. Fillmore は文中における各要素の関係を述語動詞と格範疇を備えた名詞句相互間の関係としてとらえている.[13]

Fillmore によると，

(8)

ⓐ The door opened.

ⓑ John opened the door.

ⓒ The key opened the door.

ⓓ John opened the door with the key.

ⓔ John used the key to open the door.

の各文は，述語動詞 open の主語となる名詞句の選択，補語になる名詞句の配列の違いで生じるもので，その基底構造は同一のものと考えられている. 一見したところ. ⓐ，ⓑ，ⓒはそれぞれひとつの論題しかもたない形式の如く見えるが，ⓒは，

(9) Someone used the key to open the door.

という文と意味が同じであることから，その論題はひとつではない. (9)は，

(10)

ⓐ Someone used the key.

ⓑ The key opened the door.

の二つからなるひと組の論題をもち，ⓐに焦点の当てられたときには，(9)となり，ⓑに焦点の当てられたときには，(8)ⓒとなるのである.[14] また，(8)ⓓは，

(11)

ⓐ John opened the door.

ⓑ John used the key.

の二つの論題のうちⓐに焦点の当てられたもので，(8)ⓔはⓑに焦点の当てられたものである．格理論は文を形成する各要素の配列に関する序階を決定することや，能動文と受動文の関係を述べるに当っては大きな説得力を発揮するが，上で論じたような論題的なものの記述や，はめこみ文の生成過程，主節と従属節の論述関係を述べる際にはやや弱体である．論題と焦点の文法から見ると，上の(8)，(9)，(10)，(11)の各文の間に存在する関係は，各要素間の相互的配列順序という表層上の問題ではないことが明らかとなろう．

ひとつの主題を形成するために，その主題形式（文）の中に包含されているひと組の論題が，焦点の変ることによって，表層では異った構造をもった形式となって現れることは(8)ⓓ，ⓔの例からも明らかであるが，次にこの問題について考えてみる．(8)ⓓとⓔは，前者が前置詞 with をともなった動詞句，後者は動詞と補語からなる動詞句で述部が形成されているが，この二つの述語形式には深い関係がひそんでいるように察せられる．この事実は次にあげる例文が物語るものである．

(12)

ⓐ I was glad of your company.

ⓑ Your company pleased me.

(13)

ⓐ My sister suffered from the fever.

ⓑ The fever caused my sister to suffer.

(14)

ⓐ He is afraid of death.

ⓑ He fears death.

(15)

ⓐ People died of cholera.

ⓑ Cholera caused people to die.

(16)

ⓐ These poems are works of Milton.

ⓑ Milton wrote these poems.

(17)

ⓐ John arrived there in ten minutes.

ⓑ It took John ten minutes to arrive there.

(18)

ⓐ The room was full of smoke.

ⓑ Smoke filled the room.

(19)

ⓐ That old book of mine is a rare book.

ⓑ That old book which belongs to me is a rare book.

(20)

ⓐ The package from John was to Mary.

ⓑ John sent the package to Mary.

(21)

ⓐ The ring was from John to Jane.

ⓑ John gave the ring to Jane.

以上(12)から(21)にあげた例文はすべてひとつの主題をそれぞれ二通りの文で述べたものだが，基底構造における焦点の当て方の違いによって表層構造が異るものと考えられる．各組のⓐとⓑを比較して，native speaker でなくともすぐ読みとれることは，ⓑの方が具体性が強い[15]ということである．

ⓑの文はすべて動詞と補語からなる動詞句が述部を形成しているものであり，ⓐの文はすべて前置詞中心の述部をもったものである．文の表わす意味の具体性，抽象性については，修辞学，文体論の立場から種々の分析がなされているが，この論題と焦点の文法の立場からは，主題をいかに構造化するかはその主題を支える論題をいかなる形式で構造化するかという問題なのである．

残念ながら，まだこの文法は定式化されていない部分が多く，今上で紹介した前置詞句と動詞句の個々の場合の同義性を綿密に記述した研究もまだ未開の分野である．その困難な点は，表層に現われた構造を対象にしながら奥にひそんだ観念を探るという過程が必要とされることである．将来の問題として，例えば，動詞をその潜在的に持つと考えられる論題別に整理分類し，普遍的論題を軸にした抽象的な特性（所有，授与，使用，包含など）を共有する動詞群を設け，これらの特性により論題と焦点の方向を記述するという方法が考えられよう．

注

1 Noam Chomsky の深層構造理論は *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press, 1965, 及び，"Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," と題して，Danny D. Steinberg & Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*: Cambridge, Cambridge University Press, 1971 に集約されている．

2 1975年4月，University of California, Berkeley における William S-Y. Wang 教授の講義に用いられたもの．

3 Eugene A. Nida は *A Synopsis of English Syntax*, Norman, Summer Institute of Linguistics, 1962 で構造主義理論（I. C. 分析）による構造の解明を試みたが，部分的にしか成功していない．

4 1974年10月，University of California, Berkeley における Robin Lakoff 教授の講義から．さらに，彼女の論文，"Pluralism in Linguistics," Charles J. Fillmore, George Lakoff, Robin Lakoff, eds., *Berkeley Studies in Syntax and Semantics*, Vol. I, 1974 参照．

5 George Lakoff, "On generative semantics," Danny D. Steinberg & Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press, 1971.

6 注1であげた Chomsky の論文, "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation." 参照.

7 上記4であげた Robin Lakoff 教授の講義から.

8 同 上.

9 Mario Saltarelli はこの問題について論理学, 音韻論の立場からの分析を行っている. "Focus on Focus: Propositional Generative Grammar," Jerrold M. Sadock & Anthony L. Vanek, eds., *Studies Presented to Robert B. Lees by His Students*, Champaign, Ill.: Linguistic Research, Inc., 1970.

10 ここでいう他動詞には use, employ など道具使用論題を形成する動詞は含めない.

11 生成意味論では Chomsky らのいわゆる標準理論派の用いる深層構造という用語を排し, その代りに基底構造という用語を用い, 基底構造を表わす文を基底文と呼んでいる. (上記 Robin Lakoff の講義より.)

12 この問題は別稿で扱う. Teruhiro Ishiguro, "Multiple Propositions and Surface Structures," (to appear in 1975).

13 Charles J. Fillmore, "The Case for Case," Emmon Bach & Robert Harms, eds., *Universals of Linguistic Theory*, New York: Holt, Rinehart & Winston, 1968.

14 ⓑは The door was opened with the key by someone という受動文と同意であり, 多くの言語に見られる事実である, 「oblique agent は受動文においても, またその変種と見られる能動文においても消去されることが多い」〔Edward L. Keenan の University of California, Berkeley における講演, "Some Universals of Passive in Relational Grammar" (1975年5月8日) より〕という Keenan のことばと思い合せて, ⓑに焦点があるときには, 上記の受動文の oblique agent の落ちた形式 The door was opened with the key, 及びこれに対応する The Key opened the door という能動文の形式が表層に現れるものであろう.

15 ここでいう「具体性」,「抽象性」という観念は, Roger Brown, *Words and Things: An Introduction to Language*, New York: The Free Press, 1968, pp. 264–298. に順じたものである.